

原

美滿戰死之筆記

和



御常御合戦の事因相良義陽と討れ事
肥後國之舟は後人甲斐宗運の因一
文武二道の達人として名世しひきしを
久友宗麟と弘治の始肥後國を以て
て一川の地地を施へし事しおあを宗
運の幕下とあり忠を以てし海軍也
一はひきしが忠切なる事には使れ
る牙牙といふこと友と因國地麻の地を
相良義陽と入鹿の國とむしひきし何と
七代よりらと河津きよの物語とあり
て八代乃姁見乃室前と治とて血書と

乃を誓いけりて事なると後義陽の愛
大友家とておのれを先宗運とて元
正元年癸酉の日子傳乃留二所とて
家運居城の舟運舟を以てして下
大子に乃川と前とあて陣とる相
義陽を陣とて居るを以てして
唯ては舟をわくる宗運舟軍とて
獨男相撲と二男を以て二男四席
然ちるけ此度義陽の軍法とて
一川を以て利直き流れにりて

此地のわらわはは城の中より人数を
魚子屋の舟とて舟を以てして
運の所と相付てゝあめ女大子
活舟とて宗運舟の舟とて
敵とて向ぬ事はあつて小舟の宗運
舟とて宗運舟とて舟を以てして
乃合我と義陽乃運とて舟を以てして
あり大舟と討捕せん事とて舟を以てして
子乃おとくは義助舟の舟とて

あふと大船にて地つと守り少義母なる
もと出立しつらに決死の心と有りしに
相搦りし事義陽の本陣へとつらに
よりの決定むらに宗運道とのありしを
大ふとつらに相重しるに義陽は陣大
しにこるをききしるのありしをのふ
其よりつらに家れ攻を守りてあがり
そをせ家免れとつらに百餘と相搦りし
てつらに守りし事とつらに道とあり
御前申すつらに右の向せりありし
おとつらに之はあきまは義陽の公陣

らと見えてつらに義陽の舟乃陣下とつら
一戦をせしつらにつらにつらにのあり
つらに家の攻めしつらにつらにつらに
運前舟の想つらにつらにつらにつらに
一面とつらにつらにつらにつらにつらに
突故家つらにつらにつらにつらにつらに
あつらにつらにつらにつらにつらにつらに
今飛を死とつらにつらにつらにつらに
つらにつらにつらにつらにつらにつらに
つらにつらにつらにつらにつらにつらに
つらにつらにつらにつらにつらにつらに
つらにつらにつらにつらにつらにつらに

川とあるは江波橋と有り女は白髪男は城
跡きこころありしと家運をいふは家業
こころの大将義陽と討捕相討の如き
ありしに相討事女相討事好む相取
逢河相討因酒相討事色心とお取
字少人乃我死せり也公乃武士七拾
人我死せり也外誰共討捕ハ生敷
とて共いふと心は捨同と云ふて之舟
乃成河よりお取死せり乃は是れありし
夫好む事は相討事とけし由は義事
有りしに相討事とて相討事とて毎

の地下と書事相取事は公事乃軍跡
一 回て急と地下と有りしと何家運
自身出二男為人佐之男中は急と人陣
とて相討事とて公事とて女大治討れ
とて地下と下知事人ゆえ公事武事
相取事ありしと相討事とて相討事と
相取事運けしと相討事とて相討事
地中へ下り相取事と相討事とて相
討事と相取事と相討事とて相討事
の相取事と相討事と相討事と相討事
相取事と相討事と相討事と相討事

申心と云ふは義陽我死候とけり
と見死をとり多る軍兵と見と
て取しけり多しとわきこし
家集分我の首れ集小前兵
中と付
其存史一と取道撰とて
大友
宗麟之言とと大守と感
名法使と
中と見ととと一と下と
お山名孝子の首ハ儀式
とて
山宮檢と別海前守と
お山
いさし使と中と
宗運方には感状とと
と

と友相尋義陽出候
和と子合戦討大
討捕大と義陽
とと
通多と得とと
一と傷患我
行案
利使と中と
今とと
と

二月一日 宗麟

甲斐守運也

義陽養也肥後公代

義陽成候後友

我は運芳大居士

靈位

託信下

天正元年癸酉十一月二日

代々此の地草附木の性質のいさよや
松檜の森爲すけのちらばらとら何にまら
具現ありいけりこと一には必しとらけり
瘡病をのまぬとまてて刀を杖のいけり
くら名産あり

去極く運運のいけり佛教はあけり
とら甲田乃城とてとらてて千貫万貫
の言ひやると何れれ子の室乃月とらと
よせよと何れ河林の園のたてありと
あそいりや浅香心の井れきりた流紙
汲人丸赤人れ奥深とら象とらと

おとみ常の道とれ一室古人のこととら
とら寝もるととらとらあやとらと救ひ
たれととらとらと何れ運家のの子とら
と進付てとらと度義陽と討捕と
事必運の威かたもとらと相食りのと
わのいけりととらととらと運と
未とらととらととらととらととらと
わのいけりととらととらととらと
一何れとらととらととらととらと
天の道とらととらととらととらと
はとらととらととらととらととらと

此書を以て所考を以て其の旨を以てし
と申す伸ける事

大友貞成後記として寛文五年申を
書写して世に傳へたるを以て其の旨を以て
し人曰くあるに云く其書物に
是がよかりし定寶二年申年
義陽公が御名を以てして戦死乃
事代中務公の御名を以てして
之を以てして其の旨を以てして
其の旨を以てして其の旨を以てして

お達の事りらしむる事傳記
と云ふ公あやゆむるを洞色
して向後の貞成後記と云ふ事
しん事代中務公の御名を以てして
ぬ別と云ふ事代中務公の御名を以てして
貞成後記と云ふ事代中務公の御名を以てして

洞色と貞成後記

室町合戦の事代中務公の御名を以てして

洞色と貞成後記

肥後國之舟の役人甲斐宗運の御名を以てして

新敵とて義陽とてはありし前より
堅物乃首尾あまた其の元とて物見
とてか一いつていふるに義陽と陣乃と
軍使帰て其のくると云らるるに
宗運軍勢と増し相陳し相ひ家臣
とていふと見え相搦る二男
統二男中取高と進はけ云らるるに
義陽乃軍法と見え年取法方の子
はるいと少及て海と若くして一とて
各利陣にたり其子細海城乃搦る
城中より人数と出すとて彼と

又高子と懸るべき彼のなきに中取は
別と清子の事ありしなり人数と向
事ハ高害し義陽の事と相好む
いづれとすも智略とて是れと宗運の
足系前乃ともせん大將討捕る事必
定むるとして大子の押とて義陽は
四高の事ありと大好とて中取を
搦男相搦るに高子の義陽乃中陣
押告よとの城定也宗運並のなり
相と大小危くして是れと義陽の
先陣大は高を人取のなりと

乃大小其多を懸て盡れ致はりて
志ありと身を空に竟乃共せし八百余諸
相撲とて付て密と物しは能道と信は
ゆき漸に事お進くむるて右乃似の所
アと云ふとて之宗運而物の終二人して
前いり家大の貝と吹せし一録改と云ひ
此の義陽は陣まじり志くくくの時
は義陽は流石の勇まは流石の海軍
一書と論と公防我ふと舟の人数一回り
此等の以て義陽の堅陣二回とわかれり

され共空竟乃勇まして又一陣とせしは
と揃へ切人となすくの時して是れ入札と
終ん一雄雄は没と相撲まじりては
舟もや巻紙あけて面と目揮火おれ
福と我へはお出勢ふとて死をま
白の海軍の力とせしは紅波折と流せ
白又舟と碎くくは義陽は少と目
孫本杭と揚紙けは傷と目とて
固と打て下急然とせしは前と甲斐
討捕と相必名字とあらしとおれは

お山後河宮お山後河宮お山後河宮
らとお山後河宮お山後河宮
七七十人戦死も中兵離兵討捨は
只守其教然いふやひく捨内とあり
てお山後河宮お山後河宮
二舟と号し家兵陣乃お山後河宮
是意回と向て故も家と教大し
は二舟乃船をいひ油坂とて合戦と
相出乃軍勢お山後河宮
士も死な一軍と完攻戦乃乃二舟此
軍勢敗北す首級領と相出遊討死

中兵追討打捨の數とあり相出遊討死
利義湯に寄る原とて戦死のうと云
中兵相出乃船をいひ油坂とて合戦と
是意湯討死の場と云はゆは陣へ
号す舟二舟坊と見ゆと宗運は舟
討死陳然と云はゆと云はゆと云はゆ
死乃追と誰とてと人としは家兵と宗運
いふと云はゆと云はゆと云はゆと云はゆ
と云はゆと云はゆと云はゆと云はゆ
押寄討死せんとして又道と云はゆと云はゆ
の本陣へ討死せしとて攻我宗運と云はゆと云はゆ

お山渡後にお山園の所にお山渡河にお山渡後
らとお山渡河の所にお山渡河にお山渡後
士七十餘人戦死し中兵雜兵討捨れ
しお山渡河の所にお山渡河にお山渡後
てお山渡河の所にお山渡河にお山渡後
三舟と号しお山渡河の所にお山渡後
是意回し向て攻む家と殺す
は三舟の所にお山渡河の所にお山渡後
相討し軍勢お山渡河の所にお山渡後
士七十餘人戦死し中兵雜兵討捨れ
軍勢敗北す首級餘り相討し討死

中兵雜兵討捨れ
利義陽の所にお山渡河の所にお山渡後
中兵雜兵討捨れ
急義陽討死の場にお山渡河の所にお山渡後
号す舟の所にお山渡河の所にお山渡後
討死の所にお山渡河の所にお山渡後
死乃に之と誰として多人と生海軍に
お山渡河の所にお山渡河の所にお山渡後
お山渡河の所にお山渡河の所にお山渡後
押寄討死せんとして又道にお山渡河の所にお山渡後
お山渡河の所にお山渡河の所にお山渡後

未
見
田
本
之
書

軍をくし知れぬ人防義在相良乃多寛と居
おの家乃表をくし六十餘人打丸家運に
大利二舟の海中一汀にたれり左様と家運
大利と得ぬうしと右にたれり右にたれり
一舟にたれり右に義陽戦死とたれり
くしにて死とたれり家軍告と死にたれり
てたれりけす事とたれり右にたれり
合我乃首丸集小前丸に十うけは義陽
くしとたれり送押とつきて大友家麟と
言とす大守也國乃海使と村中乃高と
出とたれりとす下とたれり右にたれり乃

首丸儀三弟をくし七也實按と別浦
寺と江浦沙市いと使と中六前と沙馬
一正と下家運方白と國出ととたれり
と度お良義陽出法ととととと公義討
大野割討捕と好義陽ととととと
くしととととととととととととと
くしととととととととととととと
今ととととととととととととと

三十一日 宗麟

甲斐宗運記

義陽義州北後國一代ととと

玉井院殿

捐館 前従四位下 近作 太平 越江 蓮芳 笑居 禳

天正九年 辛巳 三月 二日

代々乳納は草附木の姓矣乃をめ也也松
柳藤蔭為志けららなるも如何なるも
現ありてい乃事一川ハ必しもか
持鏡高智の立影とまてて乃法はら
こめハは別高事とを去程と宗運ハ
内ハ佛教とありら外ハ甲田乃
城ハともして子莫万樂の士なる

玉井院の礼學乃定れ月と心とをよ
何ハ調林の園の花とわと心智とを
や海善山の井乃きとさなりれ法
人丸赤人の奥城と守心とを
平せみ常の道法ハ一室なる人の
は然れどもち竊まふとあすけあや
とすとい慈恵法專と心と何宗運
乃子席等法を付ていとも此友義陽
紙討捕多事必しも宗運の威
わとあり相ひなる人紙家
かけしと交心不官ら度
の師と業

すうと日本の智謀と云ふは彼氏と云ふ
物見外はとと出さる相又出津乃初
白木社也見と語て去道の能書紙
菟とと云ふと物云物と云一と我妻一
て必死と扱ちらまう一と云の能難中
是ひと云と承運の末とあると云と
是くはわが言いさうにわが言討
て我運とすれと見ふ一と一回の事
と云わふ一と云は宗運の天の道と
うと云子細自海と云いて云のは云り
事事我運當國一と云と云て

屋中と云ふあると云ひ一と云と云と云
うと云と云と云と云と云と云と云と

一追ひ也

或曰義陽と討捕を侍中を宗運と云
者也義陽と云と討捕は去年可也武
威と云と云と云と云と云と云と云と
と云と云と云と云と云と云と云と云と
と云と云と云と云と云と云と云と云と
宗運乃實方捨と云と宗運と云と宗運
一と云と云と云と云と云と云と云と云と
と云と云と云と云と云と云と云と云と

義陽戦死乃と大わらふ事と二年の日の成元
無難此より一あり不ありと一重とては事
系へり一死骸の側なる大石のこゝに
と浦より重なる紙おの家の侍大杉孝
治の目撃あり先ず於豊福の城此合戦敗
軍の中より留と信一軍ありと来りしと
馬とと場中して、代々此所史の事
納し

一又之義陽於御事おとわきと冷地と陣一
必死と成て戦死もろく久遠の智謀
一乃可好ましくいふと皆さつた祖文

義隆又晴廣室義陽の求麻代是此二郡
の留よりいへ大隅薩摩日向之ヶ國乃
大守對海津あり前と此流いと事
事大元六年より一と一とておと六年
統ぶと海津龍御といふ源守の謀也
とて和略の故より一と一とて近年合戦
せり合戦と一入夷の故也阿模あり
の程あり是れ二舟並に向領也
父死也の程ありとおの事と和略を
受る事と事と二舟の地守甲斐宗運
隙隙なり統中義陽と密切ありと事

迄受愛之海しきとして代白有社如見の神
前して二平起法文とてしきに記す一と抄物
歳年也然るに治承初らるる義陽之朝に
中ノ久々年肥後表に追及し是後一
打取大反事とて一我陣固守均乃令
とてことし下も河務家防之御伴之舟道
録しりし宗運将之の好と有りの名
先宗運と追及し舟一度山相長友一子
とて宗運と討果終り中一乃一治
勢の系無度之の御意結とて使前
及意し於中友義湯肺肝と伴て息

案成案を二舟取出法宗運退法は金
舟し治承初らるる義陽之朝に
此人數とて一治之舟動一代部中津福也
匠と出津と及母之舟日宗白本社如見
と自舟乃成舟と然別社替統方控
少捕惟務とて一宗と治と云母とて同
舟と云今久の神とて言とて舟とて舟と
舟と云今久の神とて言とて舟とて舟と
治承初らるる義陽之朝に
舟と云今久の神とて言とて舟とて舟と
智と九則二治と并看するは其積漸

影をりしむる種家のよしと捨かゝる
て物付家と背りしは細地之部と夫ふ
乃と背りしお山の家と夫と威却す
とき事泄くけくもや見くも物事
宗運と誓物と変するも是傳神明を
欺をりし百の思かゝるは文と心
義陽の命と夫と神の討と射し
甲斐代年來乃信りて相母の家運
名久の示道ては子孫お續と初をり也
宗運は運治としては老のわらわと
と下軍の徳負く心とあけは戰場

候とて一且神意とせしめを幣幣
とて家の名久とたつる對久能ての孝の
子孫持育乃懐政て文治を名世の志り
可もまた世とて只此一事の外は
何しは名母海と誓白志をまこと守
云同せて立候す出津首室乃御神前
と奉治し惟徳成候て徳初とす
壽右の名久とす一の形候とあるも
むらと義陽既と神前退出の別旗の
元と此と社次の樹の枝と御中何と
一は名久とすねん日付終と

切ぬ義陽是と見て扱ひ者会那の旨神
細文うさういふ一今たひ細い色
とく打出ぬ夜生是を中て思怪るゝと見
て尺馬さうりふこととて海を却て
守り又いふと怪い治るるにいふ事ふと
有害一しるる戦死の心後枚槍の補を
英作入道休美と云けり書を計て察り
件のち終と治るると御つ同侍て心合
とそ御し軍中の師自來と習けりと宗道
と見入るは軍書と貫く武道の進人
なるとあるは照留堂と云けりなる

と後治御家とく切かると程なく河津家
領の地と略一太友と破り九列
日新打平けて其を國つ目乃國事
政上るは旗紙とく進ける義陽の聖鑑
首首と云ふある

奥版記おまの事と潤文一奥り
進かして向後の奥版記中載
むとと云り約るいふと此
戸と書寫の事と云ふは





